

報恩講

ほうおんこう



御遠忌法要

私たち真宗門徒は、宗祖親鸞聖人のご命日を期して営まれる「報恩講」を最も大切な法要としてお勤めしてきました。その「報恩講」とは別に、五十年ごとに厳修されるのが「御遠忌法要」です。教団の内外に向けて盛大に発信される大法要は、別院や一般のお寺でもお勤めされます。その時々それぞれの時代の課題に向き合い、私たちの“再出発”の一歩となってきたのが「御遠忌」なのではないでしょうか。

御遠忌の歴史

*本願寺、名古屋別院(御坊)で営まれた御遠忌法要。
350回忌以降は真宗大谷派(東本願寺)。

1262年(弘長2)	11月28日 親鸞聖人入滅
1294年(永仁2)	親鸞聖人33回忌。覚如上人『報恩講私記』を著す ※親鸞聖人50~250回忌は確かな記録なし。 特別に執行されなかったか。
1561年(永禄4)	親鸞聖人300回忌法要
1611年(慶長16)	親鸞聖人350回忌法要
1661年(寛文元)	親鸞聖人400回忌法要
1690年(元禄3)	名古屋御坊(名古屋別院)開創
1710年(宝永7)	【名古屋御坊】親鸞聖人450回忌法要
1711年(正徳元)	親鸞聖人450回忌法要
1760年(宝暦10)	【名古屋御坊】親鸞聖人500回忌法要
1761年(宝暦11)	親鸞聖人500回忌法要
1811年(文化8)	親鸞聖人550回忌法要
1843年(天保14)	【名古屋御坊】親鸞聖人550回忌法要
1861年(文久元)	親鸞聖人600回忌法要
1865年(慶応元)	【名古屋御坊】親鸞聖人600回忌法要
1911年(明治44)	親鸞聖人650回忌法要
1921年(大正11)	【名古屋御坊】親鸞聖人650回忌法要
1961年(昭和36)	親鸞聖人700回忌法要
1968年(昭和43)	【名古屋御坊】親鸞聖人700回忌法要
2011年(平成23)	親鸞聖人750回忌法要
2016年(平成28)	【名古屋教区・名古屋別院】親鸞聖人750回忌法要

*各法要の名称は、「御遠忌」「大遠忌」「御忌」「御法事」など、同一法要についても文献により様々なため、ここではすべて「親鸞聖人__回忌法要」とした。上記以外にも蓮如上人等の御遠忌法要が勤修されてきた。

真宗大谷派名古屋別院

〒460-0016

名古屋市中区橋2-8-55 tel.(052)321-9201 fax.(052)321-3184

<http://www.ohigashi.net/>

お東ネット 検索

<http://www.facebook.com/ohigashi.net>



① 本尊 阿弥陀如来 ② 親鸞聖人御影
③ 本願寺歴代上人・蓮如上人御影



御絵伝

お華東

環珞

*お寺によって異なることがあります。

親鸞聖人略年表

西暦(和暦)	年齢	事柄
1173年(承安3)	1歳	誕生。父は日野有範。
1181年(養和1)	9歳	青蓮院で出家、得度。 比叡山で20年間修行。
1201年(建仁1)	29歳	六角堂に参籠。法然上人と出遇い、専修念仏に帰す。
1205年(元久2)	33歳	法然上人より『選択集』の書写を許され、真影を図画する。
1207年(承元1)	35歳	承元の法難。越後(新潟県)へ流罪となる。
1211年(建暦1)	39歳	流罪を許される。その後、関東に赴く。
1214年(建保2)	42歳	上野国佐貫(群馬県)で三部経千部読誦。 途中で中止。常陸(茨城県)へ向う。
1224年(元仁1)	52歳	『教行信証』の草稿本が完成。 60歳を過ぎた頃、京都に帰洛する。
1248年(宝治2)	76歳	『浄土和讃』『高僧和讃』をつくる。
1256年(建長8)	84歳	息男・善鸞を養絶。
1258年(正嘉2)	86歳	『正像末和讃』を補訂。
1262年(弘長2)	90歳	入滅。

「報恩講」

「お番」の晩は雪のころ、
雪はなくても暗のころ。

くらい夜みちをお寺へつけば、
とても大きな蠟燭と、
とても大きなお火鉢で、
明るい、明るい、あたたかい。

大人はしつとりお話で、
子供は騒いじゃ叱られる。

だけど、明るくにぎやかで、
友だちやみんなよつていて、
なにかしないじゃいられない。

更けてお家へかえっても、
なにかうれしい、ねられない。

「お番」の晩は夜なかでも、
からころ足駄の音がする。

『金子みすゞ童話全集』（JULIA出版局）より

報恩講とは、親鸞聖人のご法事です。
聖人の明らかにしてくださった本願念仏
の教えに出あった喜びの集いです。報恩
講を勤めるにあたっては、多くのご門徒
が、お華束を作ったり、仏華を立てたり、
幕を張り、お莊嚴（おかざり）をして迎え
ます。そしてご門徒の人は自宅のお内仏
のお莊嚴をしてお寺へ参るのです。

金子みすゞもそうでした。報恩講のお
初夜のあり様がそのまま歌われています。

本堂の真ん中に大きな火鉢があり、そこ
で手を温めて仏法談義をしたのです。内
陣の大きな赤いろうそくが明るく照らす
中で、子どもは騒いで叱られる。でもう
れしかったのでしよう。今日はいつもの
夜とは違う、何か胸がときめくのが報恩
講の夜だったのです。大人の人は、一日
疲れた身体であるけれども、真剣に後生
の一大事に心を傾けて聞法していたので
しよう。それがもう百年以上前に、金子
みすゞが出あった報恩講のあり様です。
今も変わらないでしょう。

あらためて報恩講について考えると、
念仏の教えに出あったことに対する報謝
の集いです。その報謝とは、生かされて
あることへの感謝も含みます。親をはじ
めとする多くの人々への恩に報いること
です。私たちは、具体的には親子・夫婦・
兄弟、職場、隣近所の間関係の中で生
きています。ただ昨今の親子の殺し合い、
遺産相続のため兄弟が仲違いする現実、
核家族化が進み孤独な老人が増えてきて
いる現実、学校でいじめに遭っている子
どもたち等々、すべて現代の抱えている
社会問題です。これらの問題を課題にし
ていくには、じつは念仏の教えに聞いて
いくしかありません。日々の暮しの中で、
念仏の教えに聞いていかれた方が親鸞聖
人です。そこで問われることは、報恩講
が、私が御同朋とともに聖人の教えに出
会う場所となっているかということです。
それは私一人の日常の中で厳修されるも
のだからです。ですから、私たちにとつ
て、一年三六五日が報恩講ともいえるで
しょう。